目次に戻る

特別活動に関する大学生の意識調査
―「学級活動」「ホームルーム活動」の学習経験に焦点を当てて ―

Survey of University Students on Extra-curricular Activities at Elementary and Junior High School Levels
― Focusing on Personal Learning Experience through In-class Activities and Homeroom Activities ―

上之園　公　子・山　田　恵　次
UENOSONO Kimiko and YAMADA Keiji

キーワード：特別活動の指導法・学級活動・ホームルーム活動

はじめに

学校教育における学校行事や学校内での自治的な活動は戦前も行われており，戦後の昭和 22 年版学習指導要領（試案）には「自由研究」が創設され，その後の小学校「教科以外の活動」中学校「特別教育活動」へ再編された。昭和 33 年版学習指導要領では小・中・高等学校全てに「特別教育活動」が設置され，昭和 43 年版学習指導要領では現在の「特別活動」の名称となった。

「特別活動」は我が国の教育課程の特徴として，民主化を指向する他国からも注目されており，日直・清掃・学級会等の日本式特別活動を「TOKKATSU（特活）」として取り入れ始めている国もみられる。その一方で 2016（平成 28）年 8 月，中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「特別活動ワーキンググループにおける審議のとりまとめについて（報告）」において「特別活動に関する指導力は小・中・高等学校いずれにおいても全ての教員に求められる最も基本的な専門性の一つ」でありながら「領域として設定されている特別活動は，専門の免許がなく，養成段階で専門の課程がないことから，教科に比べ専門性という点において軽く見られがち」(1) と課題も指摘されている。その改善に向けて，若手教員の増加傾向を踏まえた現職教員の研修の充実とともに，教員養成段階においても特別活動の意義，役割，指導方法の本質についての指導が一層必要とされる。

本研究は，教職を目指す学生達に対する「特別活動」の実践力の育成に向けた基礎研究として，当該学生達の小・中・高等学校における「特別活動」の学習経験を調査し，整理するものである。この基礎的な研究を踏まえて，今後，教員養成段階における特別活動の指導力育成の在り方を見出していきたい。

Ⅰ　本研究の目的と意義

Ⅰ-1　研究の目的と方法

本研究では，教職を目指す学生達が小・中・高等学校において経験した「特別活動」の学習を調査することにより，学生達自身が捉えている「特別活動」の意義や役割を明らかにするものである。ここでは，教職及び教科等の専門的な授業の履修前である大学入学直後の学生を対象に，学生が想起しやすい小・中学校における「学級活動」と高等学校における「ホームルーム活動」について，校種別の実施状況と印象に残った内容について調査する。

Ⅰ-2　研究の意義

全国的に若手教員の増加傾向が見られる教育現場においては「特別活動には教科書等の教材がないことなどから，先輩教員からの指導技術の継承が円滑に行われなかったり，特別活動の教育的意義が十分に理解されなかったりするなど，特別活動の学習が必ずしも効果的に行われていないという課題」[(2)] が散見されるとの指摘がある。教職経験の少ない教員が学校現場で特別活動の実践力を高めていくためには，教職に就くまでにその意義や役割，基礎的な指導法を十分理解しておくことが必要である。本研究では，将来教職を目指す学生達が小･中･高等学校で経験した「学級活動」「ホームルーム活動」の実施状況と，学生達が児童・生徒の立場で捉えた「特別活動」の意義や役割を調査・分析する。これらの学生の実態調査は，教員養成校におけるこれからの特別活動の授業の在り方を考えていく上での資料となると考える。「特別活動」の役割の理解や基礎的な指導法を身に付けて教職に就くことにより，経験の少ない教員も自信をもって「特別活動」の指導ができるとともに，学校現場で自己の指導力を主体的に高めていくための基盤づくりとなることを願っている。

Ⅱ　「特別活動」に関する大学生の意識調査

Ⅱ-1　小・中・高等学校における「学級活動」「ホームルーム活動」に関する調査

Ⅱ-1-1　調査対象

調査対象は，小学校・幼稚園教諭免許，保育士資格の取得を希望する大学生とした。また，実施時期は「特別活動」に関する授業を一度も受講していない大学１年次生とした。これは「特別活動」に関する指導者としての専門的な知識を有することのない児童・生徒の立場での回答が得られるようにしたものである。今回はＡ大学において，小学校教諭・幼稚園教諭・保育士等を進路として希望する大学１年次生 78 名に対して調査を行った。なお，同大学では，進路（取得免許・資格）の決定は１年次終了時であり，本調査を行った段階では学生は保育・教職（複数免許も含む）については確定していない学生もいた。

Ⅱ-1-2　調査の内容

調査については，質問紙による記述とした。

なお，質問項目および補足説明は，対象学生が小･中･高等学校段階で実施された平成 20 年改訂（高等学校は 21 年）学習指導要領 [(3)(4)(5)] に基づいて作成した。質問項目は次の通りである。

1 「学級活動」「ホームルーム活動」に関して学生が記憶している実施状況

問１　小学校･中学校･高等学校では毎週（行事や休業日を除く）「学級活動」「ホームルーム活動」の授業が行われていた。（校種別に回答）

問２　小学校・中学校・高等学校では，「学級活動」「ホームルーム活動」の時間に学級や学校における生活上の諸問題の解決が行われていた。（校種別に回答）

問３　小学校・中学校・高等学校では，「学級活動」「ホームルーム活動」の時間に学級内の組織づくりや仕事の分担処理が行われていた。（校種別に回答）

問４　小学校・中学校・高等学校では，「学級活動」「ホームルーム活動」の時間に学校における多様な集団の生活の向上が行われていた。（校種別に回答）

2 「学級活動」「ホームルーム活動」に関して学生が記憶している実施内容

問１～問４について校種別の特に印象に残っている活動（複数回答可）を自由記述とした。

Ⅱ-2　調査結果

ここでは，調査項目ごとの結果から，「学級活動」「ホームルーム活動」に関して学生が記憶している実施状況及び実施内容を把握した。

Ⅱ-2-1　「学級活動」「ホームルーム活動」に関して学生が記憶している実施状況について

「学級活動」「ホームルーム活動」に関して，毎週（長期休業や行事等がある場合を除く）実施されていたかの問いに対する校種別の調査結果を一覧すれば〈表 2-2-1〉の通りである。

表 2-2-1 「学級活動」「ホームルーム活動」に関して学生が記憶する実施状況（校種別人数）

校種（人）	5 よく行われていた	4 時々行われていた	3 どちらとも言えない	2 あまり行われなかった	1 全く行われていなかった
小学校	67	8	2	0	0
中学校	17	17	20	17	7
高等学校	58	14	5	1	0

校種別割合を〈図 2-2-1〉に示す。

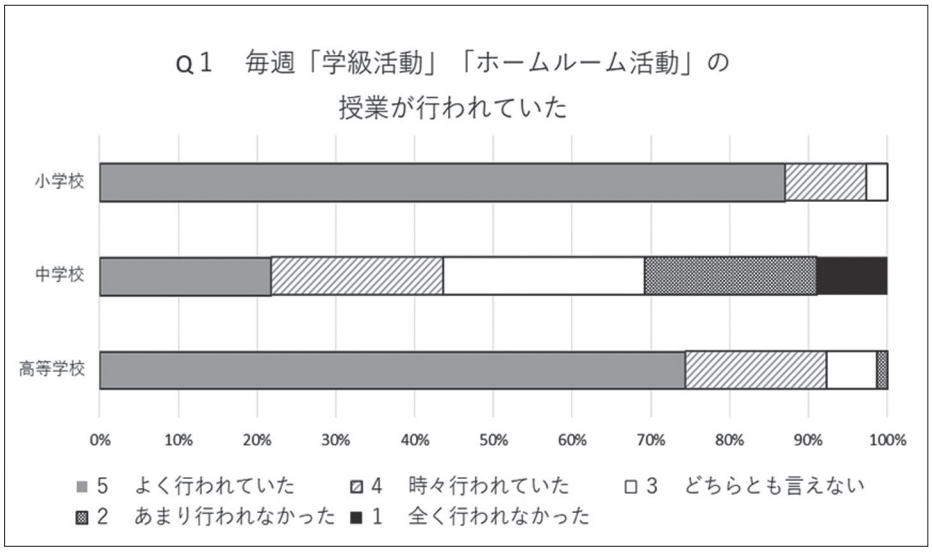

図 2-2-1 「学級活動」「ホームルーム活動」に関して学生が記憶する実施状況（校種別割合）

「学級活動」「ホームルーム活動」が時間割通りに毎週実施されていたかについては，小学校期では，86％（小数以下を四捨五入。以下同様）が「学級活動」が「良く行われていた」と答えている。

中学校期では「学級活動」の毎週の実施について「よく行われていた」が 21％で，時々実施されていたとの回答の 21％を加えても，約 4 割に留まっている。つまり，約 6 割の学生が，中学校期では「学級活動」が毎週実施されていない，あるいは想起できないことを示している。また，「全く行われなかった」と答えた学生は 78 名中 7 名いた。

高等学校においては，74％が「良く行われていた」と回答しており，「時々行われていた」を含めると 90％以上が毎週「ホームルーム活動」の実施を想起しており，「全く行われなかった」と答えた学生は 0 名であった。

Ⅱ-2-2「学級活動」「ホームルーム活動」において学級や学校における諸問題の解決の実施状況

「学級活動」「ホームルーム活動」において学級や学校における諸問題の解決が実施されていたかの問いに対する校種別の調査結果を一覧すれば〈表 2-2-2〉の通りである。

表 2-2-2 「学級活動」「ホームルーム活動」において学生が記憶する学級や学校における諸問題の解決の実施状況（校種別人数）

校種（人）	5よく行われていた	4時々行われていた	3どちらとも言えない	2あまり行われなかった	1全く行われていなかった
小学校	32	20	20	5	1
中学校	13	11	40	6	8
高等学校	21	16	32	9	0

校種別割合を〈図 2-2-2〉に示す。

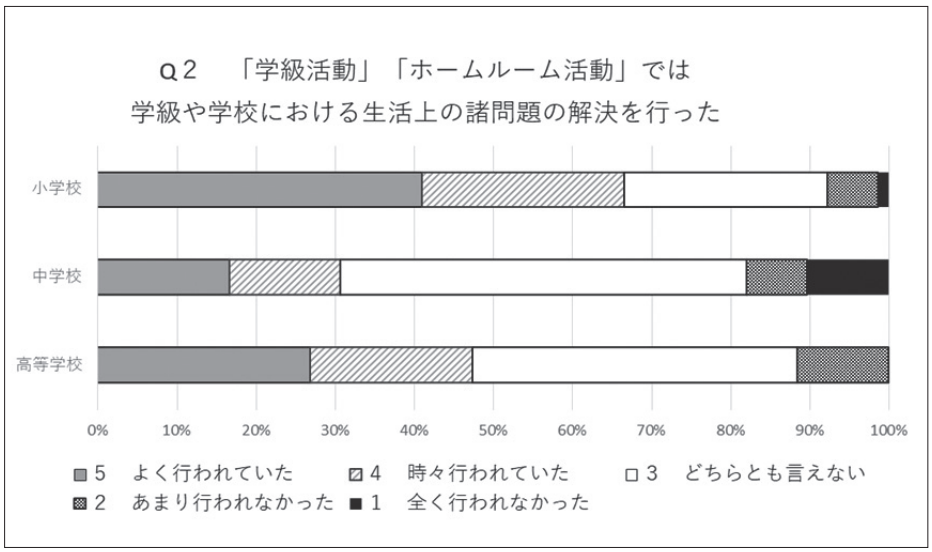

図 2-2-2 「学級活動」「ホームルーム活動」において学生が記憶する学級や学校における諸問題の解決の実施状況（校種別割合）

「学級活動」「ホームルーム活動」において，学級や学校における生活上の諸問題の解決が実施されていたかについては，小学校期では「良く行われていた」41％，「時々行われていた」26％で，7割近くがその実施を記憶している。

中学校期では「よく行われていた」17％，「時々行われていた」14％で，実施を記憶していた学生は約3割であった。

特に全体の半数が「どちらともいえない」と答えており，「学級活動」において，学級や学校における生活上の諸問題の解決が実施されていたかどうかが判断できない状況であった。

高等学校においては，「ホームルーム活動」で学級や学校における諸問題の解決が実施されていたという学生は「よく行われていた」27％，「時々行われていた」20％を合わせて，全体の約半数が記憶している。また約4割が「どちらともいえない」と答えており，実施されていたかどうか判断できない学生もいた。なお，「全く行われなかった」と答えた学生は0名であった。

Ⅱ-2-3「学級活動」「ホームルーム活動」において学級や学校における学級内の組織づくりや仕事の分担の実施状況

「学級活動」「ホームルーム活動」において学級や学校における学級内の組織づくりや仕事の分担が実施されていたかの問いに対する校種別の調査結果を一覧すれば〈表 2-2-3〉の通りである。

表 2-2-3 「学級活動」「ホームルーム活動」において学生が記憶する学級内の組織づくりや仕事の分担処理の実施状況（校種別人数）

校種（人）	5 よく行われていた	4 時々行われていた	3 どちらとも言えない	2 あまり行われなかった	1 全く行われていなかった
小学校	43	17	16	2	0
中学校	13	13	40	3	8
高等学校	29	15	28	5	1

校種別割合を〈図 2-2-3〉に示す。

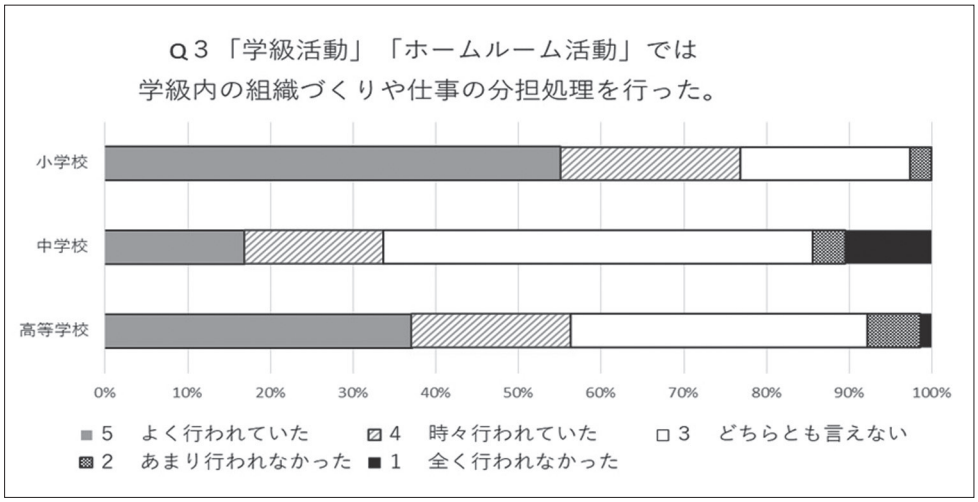

図 2-2-3 「学級活動」「ホームルーム活動」において学生が記憶する学級内の組織づくりや仕事の分担処理の実施状況（校種別割合）

「学級活動」「ホームルーム活動」において，学級内の組織づくりや仕事の分担処理が実施されていたかについては，小学校期では「良く行われていた」55％，「時々行われていた」21％で，76％の学生がその実施を記憶している。「全く行われなかった」と回答した学生はいなかった。

中学校期では「よく行われていた」17％，「時々行われていた」17％で，実施を記憶していた学生は約 3 割であった。特に全体の半数が「どちらともいえない」と答えており，「学級活動」において，学級内の組織づくりや仕事の分担が実施されていたかどうかが判断できない状況であった。なお，「全く行われなかった」と答えた学生が約 1 割おり，校種別において最も多かった。

高等学校期の「ホームルーム活動」において，学級内の組織づくりや仕事の分担が実施されていたという学生は「よく行われていた」37％，「時々行われていた」23％であり，6 割がその実施を記憶していた。また 35％の学生が「どちらともいえない」と答えており，実施されていたかどうか判断できない状況であった。なお，「全く行われなかった」と答えた学生は 1 名であった。

Ⅱ-2-4「学級活動」「ホームルーム活動」において学校における多様な集団の生活の向上の実施状況

「学級活動」「ホームルーム活動」において学校における多様な集団の生活の向上が実施されていたかの問いに対する校種別の調査結果を一覧すれば〈表 2-2-4〉の通りである。

表 2-2-4 「学級活動」「ホームルーム活動」において学生が記憶する学校における多様な集団の生活の向上の実施状況（校種別人数）

校種（人）	5 よく行われていた	4 時々行われていた	3 どちらとも言えない	2 あまり行われなかった	1 全く行われていなかった
小学校	23	21	28	5	1
中学校	16	12	37	4	9
高等学校	25	12	37	2	2

校種別割合を〈図 2-2-4〉に示す。

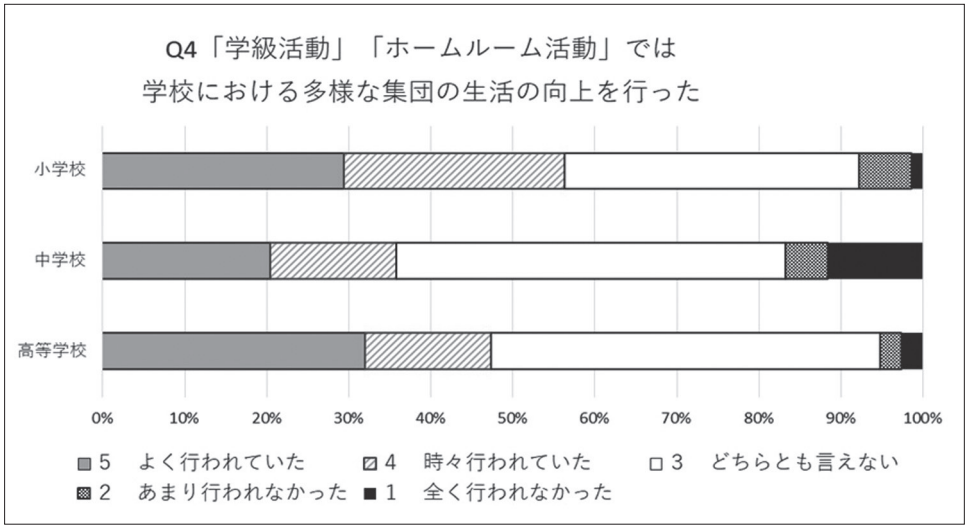

図 2-2-4 「学級活動」「ホームルーム活動」において学生が記憶する学校における多様な集団の生活の向上の実施状況（校種別割合）

「学級活動」「ホームルーム活動」において，学校における多様な集団の生活の向上が実施されていたかについては，小学校期では「良く行われていた」29％，「時々行われていた」27％で，56％の学生が実施を記憶していた。

中学校期では「よく行われていた」20％，「時々行われていた」15％で，実施を記憶していた学生は 35％であった。また，「どちらともいえない」と回答した学生が 47％おり，「学級活動」において，学校における多様な集団の生活の向上が実施されていたかどうか判断できない状況であった。さらに，「全く行われなかった」と回答した学生が 9 名おり，校種別で最も多かった。

高等学校期においては，「ホームルーム活動」において，学校における多様な集団の生活の向上が実施されていたという学生は「よく行われていた」32％，「時々行われていた」15％を合わせて約 5 割であった。また 47％の学生が「どちらともいえない」と答えており，実施されていたかどうか判断できない状況であった。なお，「全く行われなかった」と答えた学生は 2 名であった。

Ⅲ　本研究のまとめ

本研究は，教職を目指す学生達に対する「特別活動」の実践力の育成に向けた基礎研究として，当該学生達の小・中・高等学校における「特別活動」の学習経験を調査し，整理したものである。調査結果から次の実態が明らかとなった。

第 1 に，「学級活動」「ホームルーム活動」の時間割通りの実施が小・中・高等学校の各期において異なることである。小学校期は回答者にとって 10 年前後経過していることや，その時期の発達段階から想起が難しいと予想される期間であった。しかし，「学級活動」が時間割通りに実施されたと，ほとんどの学生が答えており，「学級活動」の授業を記憶していた。つまり，小学校においては他教科と同様に毎週「学級活動」の時数が確保されており，学生が他教科や他領域の内容と混同することのないレベルの印象の強い「学級活動」の授業が行われていたことが推測される。自由記述においても時間割上に示されていた名称について，「学活」「学級会」「学級」「学級活動」とほとんどの学生が想起することが出来ていた。

しかし，中学校期においては「学級活動」の授業の毎週の実施を記憶している学生が 4 割程度となり，全く授業が想起できない学生や授業が実施されていないと回答した学生が校種別の比較において最も多い。「学級活動」の時間が他の授業や活動に置き換えられていたか，時間割通りに実施された場合も学生達が小学校で経験した「学級活動」と同様の授業が実施されなかったと考えられる。また，実施されたと回答した学生に時間割上に示されていた名称を問うと「学活」「ホームルーム」「道徳」「総合学習」「総合的な学習」との回答があり他の教科や領域との混乱が見られた。小学校の「学級活動」の記憶はあることから，他の教科や領域と混同する内容が実施されたか，別の領域の授業に置き替えられた場合もあったと推測される。

高等学校期においておける「ホームルーム活動」は，学生達の多くは毎週実施されたことを記憶している。時間割上の名称について問うと，ほとんどの学生が「ロングホームルーム」「LHR」と回答しており，他教科や領域との混乱は見られなかった。

第 2 に小学校・中学校・高等学校では，「学級活動」「ホームルーム活動」の実施内容において，校種別に偏りが見られた。

今回は，「学級活動」「ホームルーム活動」において，学生達が小・中・高等学校で学習した時期の学習指導要領「特別活動」において示されている項目の中から学生が想起しやすい「学級や学校における生活上の諸問題の解決」「学級内の組織づくりや仕事の分担処理」「学校における多様な集団の生活の向上」の 3 項目に焦点を当てて調査を行った。

小学校段階では 3 項目ともに高い実施状況であった。特に「学級内の組織づくりや仕事の分担処理」は係活動等において 7 割以上の学生が経験しており，「学級や学校における生活上の諸問題の解決」「学校における多様な集団の生活の向上」においても約 6 割の学生が実施を記憶していた。つまり，この期には，「学級活動」が時間割通りに実施されるとともに，これらの 3 項目も意識して授業が行われていたと推測できる。

これに対して，中学校段階では 3 項目ともに約 3 割に留まっている。印象に残る内容についての自由記述では「先生の話」が最も多く，「道徳」「総合」などがみられ，この期では小学校で経験した「学級活動」とは異なる内容が実施されていたと考えられる。3 項目ともに全く実施されていないと回答した学生も複数いたことはこの期の特色である。教科の時数は確保し，「学級活動」が他の領域の活動や教師による生徒指導の時間として活用されていたことが推測される。

高等学校段階では，3 項目ともに約半数が実施を記憶していた。特に「学級内の組織づくりや仕事の分担処理」の実施を記憶している学生が多く，自由記述にも「ホームルームの時間」に「学級

内の係決め」「各教科の係担当を決める」などのように学級内での係に関する記述が見られた。また，「学校における多様な集団の生活の向上」において印象に残っている内容についての自由記述を見ると，合唱祭や体育祭参加にむけてのクラスでの計画や準備を記述している学生が多い。また，高等学校において，「ホームルーム活動」全体で最も印象に残っている内容を問うと「進路についての先生の話」「進路についての面談」が最も多かった。この期では，クラスで集まる時間が少なくなり，「ホームルーム活動」の時間は，学校行事への参加の準備や学級内での係の決定，及び担任が進路に関する指導等を行うために必要な時間として機能していたと考えられる。なお，高等学校段階においては，中学校のように，教師による生徒指導の実施の記述はほとんどなくなっている。

以上のことから，「学級活動」「ホームルーム活動」における「学級や学校における生活上の諸問題の解決」「学級内の組織づくりや仕事の分担処理」「学校における多様な集団の生活の向上」の3項目の学習経験では，小学校段階では当時の学習指導要領を踏まえた3項目が実施されていたが，中学校段階では，生徒指導的な内容や他教科等への振替等，3項目が実施されていない場合がある。また，時間割通りにかなり実施されている高等学校段階では，学校行事への参加や準備や係の決定，進路指導等を中心に実施されていることが把握できた。つまり，3項目の中で特に「学級や学校における生活上の諸問題の解決」は，学生によっては学習経験を想起できるのは小学校段階に留まっている場合もあると言える。「特別活動」の「学級活動」「ホームルーム活動」においては，小学校・中学校・高等学校の接続や発展，つまり段階的な学習経験を持たない学生が多くいることが明らかとなった。

おわりに

本研究においては，これから教職・保育職を目指そうとしている大学1年次生の小・中・高等学校における「学級活動」「ホームルーム活動」の学習経験を調査し，整理したものである。調査結果から，学生達は小学校段階では「学級活動」について学習したことを想起できるが，中学校・高等学校との接続・発展が図られていないことが把握できた。例えば，「学級や学校における生活上の諸問題の解決」についての資質・能力が段階的に育成されていないといえる。そのため，「特別活動」の意義や役割を実感していない学生が多くいると考えられる。

今回は「学級活動」「ホームルーム活動」の学習経験に焦点を当てて調査したが，「特別活動」の他の内容についても同様の調査を実施していく必要がある。

学校現場で「特別活動」の指導ができるとともに，自己の指導力を主体的に高めていくための基盤づくりとして，教員養成校において「特別活動」の役割や意義の理解を図り，基礎的な指導の実践力を身に付けるための指導の在り方について，学生達の実態を踏まえて提案していきたいと考えている。

【注】

（1）中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「特別活動ワーキンググループにおける審議のとりまとめについて（報告）」2016年8月。

（2）国立教育政策研究所『学級・学校文化を創る特別活動』 2016年。

（3）文部科学省『小学校学習指導要領解説特別活動編　平成20年8月』東洋館出版社，2008年。

（4）文部科学省『中学校学習指導要領解説特別活動編　平成20年9月』株式会社ぎょうせい，2008年。

（5）文部科学省『高等学校学習指導要領解説特別活動編　平成21年12月』海文堂出版，2009年。